

<2011 年度電気情報系親睦会 委員長 あいさつ>

「大学の原点回帰の機会」

電気情報系親睦会 委員長 金井 浩(電子工学専攻)

千年に一度の巨大地震に見舞われ、ご家族・親戚・知人が被災された方々には心からお見舞い申し上げます。私ども電気系1号館は損壊も酷く、使用できなくなる可能性もあり、2週間を経た今も通電の見通しが立たない状態にあります。

しかし、同じ仙台市でも海に近い地区では依然大変な状態が続いています。さらにこれから、仙台や日本にどれほどの苦難が待ち受けているのかも想像できない状況で、この国や大学を復旧・復興することが私どもの責務かと思ひ、一生懸命に努力する所存です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。この状況では、自分にできる最大限のことを「希望をもって、元気を出して頑張ろう」という言葉に尽きます。

阪神大震災の後、被災された大学から暫くの間、学術論文が出てこなかった、ということがあったそうです。今回それを上回る巨大地震に被災し、このままでは電気系あるいは工学研究科の研究教育面での停滞が起きるかもしれません。このような環境ではやむを得ないかも知れませんが、学問や研究は本来、他人との競争ではなく、自分との戦いであるので、強い意志をもって自分の目標に向かって頑張る、しかないと思います。「この被災を、研究が進まない・進めない言い訳にはいけない」と感じます。

被災から2週間、この間に、本来開催予定だった多くの学内外の会議や行事も中止されました。それはあたかも大学開校当時の素朴で最小限のサービスしかなかった時代に対応していたのかも知れません。この貴重な経験も、大学を「原点回帰」させる良い機会と前向きに捉えることができます。大学での教務・研究等の活動で必要最小限のものは何であるか、を考える機会です。我々は年々忙しくなってきました、というのは、詰まる所、大学や学会活動における様々なサービスが過剰になってきていたのかも知れません。

あらゆる行事や会議がリセットされた現在、本当の豊かさを目標とし、そのために必要最小限な事項は何か、という視点で、今後、一つ一つの事柄を十分に精査しながら、大学や学会活動に新たに組み入れるようにしてはいかがでしょう。少なくとも、この震災前よりも「教育・研究に集中できる環境作り」を目指したいと思います。

この親睦会が、今回の震災復興の一助となり、その遥か先にある「心豊かな環境」作りのお手伝いできれば大変幸いです。